

平成23年度マネジメント研究センタープロジェクト研究課題最終報告書

研究プロジェクト主題	： 瀬戸内海の水軍に関する歴史的資源調査及びその活用方法に向けた研究
代表者	：(前期)森永智絵、(後期)元岡敬史
修了生等	：米山俊哉
院生	：吉原文雄、竹本尚史
指導教員	：戸田教授、後藤教授、末平准教授
注：①問題意識、目的 ②研究方法 ③分析結果 ④考察 ⑤今後の課題 ⑥成果(報告、論文等)の順に記入してください。字体はMS明朝、文字フォントは10.5。4ページを超えないで下さい。	
①問題意識、目的 <p>アジア地域等との歴史的交流によって成熟し、その後衰退に直面している瀬戸内の港町の地域活性化と観光関連産業の振興を図るには、文化的価値を発掘し、つながりを再生する試みが有効と考える。</p> <p>瀬戸内の港町の生業、食、伝統行事等の背景にある「水軍」に関する文化遺産等の保存・継承の実態を把握して「文化の道」を構築する方策を検討し、広島県の進める「瀬戸内海の道構想」と連携した新たなツーリズムの開発につなげる。</p>	
②研究方法 <p>広島県、松山市、中国運輸局、中国経済連合会、中国電力エネルギー総合研究所をメンバーとする「瀬戸内水軍研究会」を設置し、10回の勉強会、2回の現地調査、3ヶ所でのアンケート調査を実施した。</p>	
③分析結果 <p>1. 水軍資源(城跡・博物館等)の現状ならびに関係者へのヒアリングによる広域観光ルートへの検討結果</p> <p>(1)宮島・広島・呉・松山ルート</p> <p>広島と松山を結ぶ海域には、様々な航路があり、陸路に加えて瀬戸内海を体感できる航路をいかに活用できるかがポイントとなる。また、このルートでは、目的地までの移動時間が短縮されることで目的地での滞在時間が増え、消費の拡大が期待できるが、その分、運行料金が高くなるため、この割高感の解消が課題となる。</p> <p>(2)しまなみ海道ルート</p> <p>地域資源、伝統行事、体験型観光など、現在でも豊富なメニューが用意されている。しかしながら、その多くがしまなみ海道から離れた地域に点在しており、多くの移動時間を費やさなければならない現状にある。また、しまなみ海道の乗降回数に比例して料金もかさんでしまうこととなるため、満足度の高い厳選されたプランをいかに提供できるかが課題となる。</p> <p>(3)江田島・呉・蒲刈・鞆ルート</p> <p>ルート全体の距離が長く、2次交通も乏しい地域であるため、移動手段としては、自</p>	

自動車や貸切バスなどに限定される。また、フェリーの区間を3箇所、高速道路・有料道路の区間を2箇所経由しなければならず、料金が大幅にかさむことになる。

特に、「木江（大崎上島）⇄宮浦（大三島）」間は、フェリーが1日2便しか運航されておらず、現在の発着時刻を前提にプランを設定することは、極めて困難であると予想される。

2. アンケート調査による観光客の形態・行動・認知度の分析結果

・調査日時：平成24年1月21日、22日

・調査地点と回答数：呉市海事歴史科学館・207人、せとうち茶屋大三島・210人、松山城・201人

(1)発地点（近距離・遠距離）に着目した総括

近距離からの観光客と遠距離からの観光客の違いに着目した整理すると、近距離からの観光客は3つのエリアに共通して、次のような特徴を持っている。

- ①マイカーの割合が最も高い、
- ②家族と一緒に訪れる割合が最も高い、
- ③呉エリアで若干の例外はあるものの、3つのエリアとも、概ね4回以上の割合が高い、
- ④男性と女性の割合が概ね半々程度となっている
- ⑤日帰り客が6割以上を占めている。

これに対して、遠距離からの観光客については、次のような特徴を持っている。

- ①呉エリア、松山・道後エリアではその他（新幹線や航空機、JR）の割合が、しまなみエリアでは団体バスの割合が高くなっている。また、呉エリア、松山・道後エリアにおいてマイカーの割合が一定程度を占めており、マイカーの利用率は、遠距離においても比較的高い。
- ②同伴者については、エリアによっての違いは見受けられない。
- ③初めてという割合が高くなっている。
- ④男性の割合が6割以上と高く、特にしまなみエリアでは、8割に達し極めて高い割合となっている。これは利用する交通手段として団体バスの割合が最も高いこと、同伴者として職場の人の割合が最も高いことなどが理由と推察される。
- ⑤宿泊客(1泊以上)が9割前後を占めている。

一方、距離に関わらず共通な事項として、エリアを跨る周遊性(広域性)が指摘できる。すなわち、近距離、遠距離ともに、しまなみエリアと松山・道後エリアでは、相互に広域観光ルートとして観光客の周遊性がみられるものの、両エリアと呉エリアとの広域性はほとんどみられない。

(2)着地点（訪問するエリア）に着目した総括

次にエリアに着目すると、すべてのエリアに共通した特徴として次の事項が指摘できる。

①訪問地点別に観光客の周遊性を分析すると、まず、同一エリア内での周遊性をみると、近距離からの観光客に比べて、遠距離からの観光客の方が周遊する割合は高くなっている。

②情報収集方法は、3つのエリアとも、概ね口コミの割合が高いが、しまなみエリアでは、他のエリアと比べ、近距離・遠距離にかかわらず、観光パンフレットの割合が相対的に高くなっている。また、3つのエリアとも、観光パンフレットによる情報収集の割合は、近距離と比べ、遠距離の方が圧倒的に高く、観光パンフレットは、遠距離からの観光客にとって貴重な情報源になっているものと推察される。

また、エリアによって異なる特徴もある。

①訪問目的は、3つのエリアとも、総じて観光施設の割合が高いが、遠距離から松山・道後エリアへの観光客は、温泉を訪問目的とする割合が圧倒的に高い。また、しまなみエリアでは、自然景観を目的とした観光客が一定程度存在している。

②観光客の年齢構成は、呉エリア、しまなみエリアでは、年齢層による大きな偏りはないが、松山・道後エリアでは、20代から30代の割合が相対的に高くなっている。これは、「近場の温泉旅行」ブームが、若者層やニューファミリー層を中心に波及していることが主な理由ではないかと推察される。

③これに対応して、消費金額がエリアによって異なっている。すなわち、近距離、遠距離とも**3,000**円以下が**5**割から**6**割、さらに**5,000**円以下が**8**割程度を占めているが、松山・道後エリアへの遠距離からの観光客の支出が比較的高くなっている。これは、温泉と宿泊という要素が影響しているものと考えられる。

(3)認知度についての総括

水軍ゆかりの史跡施設、水軍の歴史文化ストーリー、水軍に関連する伝統行事については総じて認知度が低い。この中で水軍ゆかりの史跡施設として比較的認知度が高いと言えるのは、大山祇神社のみであり、近距離においてのみ、大山祇神社、村上水軍の墓、因島水軍城の認知度が比較的高くなっているに留まっている。水軍の歴史文化ストーリーでは、壇ノ浦の合戦のみ、水軍に関連する伝統行事としては近距離においてのみ、三原やっさ祭り、因島水軍まつり、水軍レースについて比較的認知率が高くなっている。

また、郷土料理として、尾道ラーメン、あなご飯、焼きカキが高い認知率を示しているが、水軍由来の郷土料理としては、鯛めし以外は、認知率が高いものは見られない。

以上のことについて、城でイメージされる城の石垣や天守閣等の建造物が、開発等により残っていないこと、壇ノ浦の合戦以外が小説やテレビドラマとして取り上げられて

いないことが大きな理由として指摘できる。事実、近距離、遠距離にかかわらず水軍に関する人物として平清盛が3つのエリア共通で認知率が高くなっており、藤原純友、小早川隆景、秋山真之の認知度が2割を超えているところもあるが、これは小説やテレビドラマ等の影響と推測される。

3.瀬戸内観光ルートの提案

上記の分析を踏まえて、水軍資源を活用した次の3つの瀬戸内広域観光ルートを提案する。凡例：---は陸路、～は航路を示す

A ルート：広島駅---宮島口～宮島～松山・道後～呉---広島駅

(テーマ例) 瀬戸内海道1号線を巡る瀬戸内水軍浪漫の旅

世界遺産と名湯・道後温泉、そして、瀬戸内水軍浪漫の旅

B ルート：広島駅---広島(呉)～松山・道後---大島---大三島---因島---尾道---福山駅

(テーマ例) 瀬戸内水軍浪漫の旅 ～村上水軍、河野水軍、忽那水軍ゆかりの地を巡る

瀬戸内海道1号線としまなみ海道で行く瀬戸内水軍紀行

C ルート：広島駅---広島(呉)～松山・道後～周防大島---岩国---宮島口～宮島～宮島口---広島駅

(テーマ例) 西瀬戸水軍浪漫の旅 ～宮島・広島・松山・道後・周防大島・岩国を巡る旅

④今後の課題

1. 水軍資源を活用した新たな瀬戸内観光ルートの創生の可能性についての検討
例: 旅行会社等との連携によるチャータークルーズ実施可能性
2. 水軍資源の認知度を高めるための方策検討
3. 水軍をテーマとした旅行商品造成へ向けての環境整備の検討
4. 広域連携のもとで地元の機運を醸成するための検討

⑤成果（報告、論文等）

1. 報告書「瀬戸内海の水軍に関する歴史的資源調査およびその活用方法に向けた研究」作成(H24.4)。
2. るるぶ特別編集「瀬戸内・松山」への掲載(H24.3)
3. 中国経済連合会観光文化委員会にて、本研究成果の一端を報告(H24.4.19 リーガロイヤルホテル広島)
4. アマルフィ国際シンポジウムにて、本研究成果の一端を報告(H24.6.1～2, イタリア・アマルフィ市)
5. 日本計画行政学会全国大会にて、報告予定(H24.9.7-8, 岡山大学)

以上